

関西大学工学部化学工学科（現・環境都市工学部エネルギー・環境工学科）

2021.5.7.発行

第 27 回 同 窓 会 報

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35

TEL06-6368-1121

同窓会編集委員会 発行

<<< 巻 頭 言 >>>

「激動の 2020 年度を振り返って」

エネルギー・環境工学科 教授 2020 年度教育主任
田中 俊輔

同窓会の皆さま、昨年からのコロナ禍が社会の隅々にまで及ぶ中、新年度を迎えましたが、いかがお過ごしでしょうか。

2020 年度はまさに、新型コロナウイルスに明け暮れた 1 年でした。昨年 4 月には教室で授業が行えない、研究室も閉室、大学キャンパスに入ることすらできないという状況の中、学生、教員、技術・事務職員みな急遽オンライン授業への対応を迫られ、春学期は定期試験などを含め原則オンライン形式で授業を実施しました。5 月 16 日の大阪府の休業要請解除、5 月 21 日の大阪府への緊急事態宣言の解除を受けて、6 月以降、感染拡大予防対策を講じた上で、実験・実習と研究室の活動を制限しながら再開できましたが、大学生活にとって非常に大切なキャンパスでの人的交流、組織的交流は大きく制約されました。学内の会議はメール審議やオンライン会議に振り替えられ、化学工学会をはじめ様々な学会が研究発表会や講習会を中止したり、オンライン開催に変更されたりしました。必ずしも負の面ばかりでなく、コロナ禍だからこそ見つめ直し、柔軟に対応することによって得られる機会を通して新しい価値観を得たり、新たに挑戦したりすることもできた 1 年でした。

新型コロナウイルス感染症の発生から 1 年余りが経過しましたが、この厄介な感染症は新たな変異株ウイルスも出現して、今なお先行きの見えない困難な状況が続いています。ワクチン接種の効果が出るまでは、感染の波がこれからも続くことでしょう。皆さまには感染予防対策を怠らず、感染しない・させないように慎重に慎重を重ね、これからもより一層職務に邁進していただきたいと願っています。

新型コロナウイルスの出現、そして感染症拡大はこれまで誰も経験したことがない未曾有な事態をもたらしましたが、この苦難とともに世界はカーボンニュートラル（CO₂ 排出実質ゼロ）をはじめとする持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて急速に進んでいます。また、「ウィズコロナ時代」、そして「ポストコロナ時代」はこれまでとはまったく異なる時代になると言われるほど、私たちは大きな転換点を迎えています。これに対して、化学産業は常に時代の変化に対応し、新しい時代で求められるもの

を提供することができると信じています。本学部は工学部（1958年設立）の改組に伴い2007年4月に開設され、本学科は前身の化学工学科（1958年発足）から一貫して化学工学教育を行い、時代の要請に応じながら多くの皆さま卒業生・修了生を社会に輩出してきました。そして、2022年4月からは『エネルギー環境・化学工学科』に改称（2021年4月届出済）し、本学でもっとも古くて、もっとも新しい理工系学科に生まれ変わる予定です。本学科は、経済性とエネルギー・資源の循環型社会の形成を両立し、社会の変革と地球環境の保全を支えるべく、より一層充実した化学工学教育と研究活動を進めて参ります。

最後に学科教員一致団結して学科ならびに同窓会の発展に努力して参りますので、皆さまのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます、皆様の健勝とご活躍を心よりお祈りいたします。

<<< 卒業生に聞く >>>

「近況報告」

平成8年修士卒 室山研究室
タンゴ・ダンス講師
福田利加

このような場で報告させて頂くのは大変恐縮なのですが、林順一先生から『リカ姐の話は面白そうだからよろしく』と直々にメッセージを頂きましたので、依頼を受けました。研究室でご指導頂いた室山先生、そして林先生には本当にお世話になりました。あの頃、今はなき親愛なるトタン屋根の研究室で、住んでいるのかと勘違いする程、長い時間を過ごしました。優秀な先輩・後輩の皆さんが本当に仲良くして下さい、お陰様で大変充実した研究生活を送ることが出来ました。これまで感謝の気持ちを表す機会が有りませんでしたので、この場を借りて研究生活に関わった全ての皆様に心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

さて現在、私は南米アルゼンチンの首都ブエノスアイレスに住んでいます。ちょうど地球の反対側にある国。サッカーがお好きな方は「マラドーナ」や「メッシ」と言えばお分かり頂けるかも知れません。サッカーの他に「タンゴ」が特徴的なのですがご存知でしょうか。ユネスコ世界文化遺産にも指定されているアルゼンチンの文化で、音楽とそれに合わせて踊るダンスが「タンゴ」。私はその「タンゴ」が好きになり20年程前からこの国に度々訪れるようになりました。2016年からアルゼンチン・ブエノスアイレスに住んでいます。職業でいうとタンゴ・ダンスの講師ということになります。パンデミック以前は、拠点のアルゼンチンを始め、アメリカ、ヨーロッパ、日本、韓国など、色々な国でタンゴのレッスンをしたり、ミロンガ（タンゴダンスのパ



ーティー)を開催したりしていました。

コロナウィルスの感染が広がった 2019 年、2 月末まで日本で仕事をしていましたが、すでに日本ではウィルスが話題に登っていました。その後、ヨーロッパ方面で約 2 ヶ月のレッスン・ツアーを予定していたのですが、イタリア・ミラノに滞在中の 3 月初めには、ウィルス感染が広がり、ミラノがあるロンバルディア地方が封鎖されてしまいました。そうこうしている内に、アルゼンチンにもウィルス感染が発覚、みるみる内に感染者が増え始めたため、大慌てでチケットを取り直し、3 月 11 日にブエノスアイレスへ戻り、10 日間の完全自宅隔離生活が始まりました。

食料品を受け取りにアパートの入り口まで取りに行っただけで、「隔離を守っていないから警察に通報するで！」と近所のおばちゃん達に脅され、「ご飯食べんと過ごせってことなん？」と言い返しそうになるのをグッと堪えて、「では食料品どうやって受け取りましょう？」と腰を低く返事すると、「私が部屋まで届けてあげるわよ」と優しいご近所のお姉さんが助け船を出して下さいました。そんなこんなで、ほぼ一切外出せず 10 日間を過ごし、やっと旅行帰りの自宅隔離期間が終了したと思いきや、アルゼンチンでの感染者が急増、3 月 20 日にはアルゼンチン政府から自宅隔離令が発令され、引き続きの引きこもり生活。外出はスーパーへの買い物ぐらい。その自宅隔離令は約 7 ヶ月続き(世界一長い自宅隔離と言われました)、その後は「隔離令」ではなく「ソーシャル・ディスタンス令」に。その後少しづつ規制が緩和されて来ましたが、アルゼンチン人にとってとても大切な真夏の年末年始、そしてバケーション・シーズンの 1~3 月が到来。

バケーションでの気の緩みもあり、大きな第 2 波がやって来ました。またもや規制が厳しくなり、夜 12 時から朝の 6 時までは、エッセンシャル・ワーカー以外は外出禁止。公共交通機関にも一般人は乗れません。そう、もちろん、タンゴ・ダンスのレッスンやミロンガ開催なども一切出来ません。タンゴはペア・ダンスで、男女がかなり深く抱擁して踊るので、このパンデミックで大きな打撃を受けている分野。いつになったら活動再開出来るのか、まだ見通しが立ちません。

今は、化学工学とはかけ離れた世界に身を置いています、研究を通して学んだ事は、私の人生に大いに役立っています。失敗を恐れず、諦めずに何度でも何にでも挑戦する事、そして何事にも柔軟に対応する事。関大・化学工学科で学べた事は私の誇りであり、学生時代の思い出は人生の宝物です。

この世界的なコロナ禍が収束し、安心して生活できる日が 1 日も早く戻ってくる事を願います。どうか皆様、心身共に健やかに過ごしてください。

室山先生、林先生、そして研究仲間達との再会を楽しみに。



「社会人 3 年目を終えて」

平成 30 年修士卒・岡田研究室

株式会社栗本鐵工所

和田 佳也

私は 2012 年 4 月に環境都市工学部エネルギー・環境工学科に入学し、研究室はナノ粒子工学研究室に在籍していました。

私の仕事は、学生時代に学んだ分野と大きく異なります。就活の際、もし新しいことにチャレンジするなら今しかないと考え、思い切って化学工学や研究テーマとは異なる分野に挑戦することにしました。

現在は、株式会社栗本鐵工所 化成品事業部に所属し、強化プラスチック製品の開発・設計を主な仕事としています。この部署は、実働部隊 5 人で全国の設計技術依頼を対応する少数精鋭部隊でした。大学で学んだ知識は、ほとんど使うことがありません。新しい分野に飛び込んだ方がいいものの、自分に何ができるのか、どんな仕事待ち受けているのか不安でいっぱいでした。

そんな新入社員の一年間は不安で押しつぶされそうになり、仕事も思うように上手くいきませんでした。しかし、二年目になった頃から心に余裕を持てるようになり、不安よりむしろ会社の製品についてもっと知りたいと思うようになりました。こうして仕事に対する向き合い方が変わった頃から、様々なことに興味を持つようになり、製品知識、製造法、施工に関して等、製品の上流から下流に至る流れまで分かるようになっていました。興味を持てなかった時は、知識は頭の中で「点」として存在していましたが、興味が湧いてくると、知識の点と点が繋がり「線」になり、全体の事柄として見えるようになったのです。そうなるからは、仕事がとても楽しく感じれるようになりました。

このことを通して、仕事は、有用な知識を持っていなくとも、新たなものをどんどん得たいと思う貪欲な好奇心や興味があれば、自然と身につくこと。また、そうやって新たなことを知ることで自分の世界が広がることを体験しました。

実は私は、研究室生活ですでにこのことを経験しています。当時、よく知らなかった燃料電池という分野にチャレンジし、研究を進め、新たな発見に出会う喜びを感じていたのです。この体験があったからこそ、今の仕事にチャレンジしてみようと思えたのかもしれない。研究室生活があったおかげで今の自分があると考えています。

まだまだ、技術者としては未熟な私ですが、当社は関大の OB がたくさんおられるため、大学にも会社にも恥じない人材になれるよう、これからも成長していきたいと思っています。

最後にはなりますが、本誌を書く機会を与えてくださった岡田先生ならびにご関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

<<< 学生の窓 >>>



「大学生活で学んだこと」

2021 年修士卒・村山研究室

和田 祐介

私は 2015 年 4 月にエネルギー・環境工学科に入学し、博士課程前期課程までの 6 年間を関西大学で過ごしました。私の大学生活を振り返ると、多くのことを学びました。

私は入学当初、学科の勉強以外では英語がこれから重要と考えていたので、英語力を伸ばしたいと思っていました。入学後、関西大学学術研究会英語研究部（略称 ESS）に入部し、約 3 年在籍しました。そこでは、私が苦手だった英会話を通して、英語でコミュニケーションをとる練習の場となりました。大学 3 年生では部全体の経理担当という重要な役職を任せて頂きました。お金の管理の大切さはもちろんのこと、1 つの組織を健全に運営するうえで、所属メンバーとの報告・連絡・相談を常に心掛けることの大切さを身に染みて感じました。

ESS で先輩方の留学体験談を聞くうちに、私も海外で何か挑戦してみたいと思うようになりました。大学 2 年生では、夏季休暇を利用してカナダのカルガリー大学で行われた英語研修プログラム（関西大学国際部主催）に参加しました。ホームステイでは英語でコミュニケーションをとらなければならない環境だったので苦労しました。はじめは文法を意識しがちで思うように話せませんでした。が、「相手に伝われば良い」くらいの感覚で話すように意識すると気持ちは楽になり、少しずつ言いたいことを言えるようになりました。英語の上達はまだまだでしたが、外国の方と話すことへの不安や恐怖心はなくなりました。

この経験を活かして大学 3 年生でも何かしようと思いました。当時、私は大学卒業後の進路を決めていませんでした。まずは「働くこと」について考えようと思い、夏季休暇を利用してアメリカ・ロサンゼルスで行われた国際インターンシップ実習（関西大学キャリアセンター主催のビジネスプログラム）に参加しました。プログラムの中で、ロサンゼルス在住の関大 OB・OG の方々やグローバルに活躍される方々からお話を聞く機会がありました。専門知識を学ぶことの有意性を教えて頂き、私が学科で学んでいた「化学工学」の素晴らしさに気付くことができました。今になって振り返ると、大学院進学を決め手の 1 つとなる機会だったと思います。実習を通して、固定観念にとらわれずに広い視野を持つことの大切さを学びました。「日本だけではなく、世界を見る」ことや「自分が興味のないことにも目を向ける」ことで新たな発見ができるようになったと思います。私は控えめな性格ですが、せっかく得られた貴重なチャンスを逃さないように積極的に相手に質問し、行動するようになりました。この経験から学んだことは就職活動でも活かしました。

カルガリーとロサンゼルスではともに 1 ヶ月程度の短期間でしたが、日本とは異なる文化や環境に触

れながら多くの経験をさせてもらったので参加して良かったと思っています。

ここまで話が長くなりましたが、大学 4 年生になる直前に資源循環工学研究室に配属となりました。村山先生、松岡先生の指導の下、大学院を含めて 3 年間研究活動を行いました。研究に限らず、先生方や研究室メンバーの方々とコミュニケーションをとる機会が多く、良い環境の中でディスカッションすることができました。特に、相手に伝わる発表を意識できるようになり、プレゼンテーション能力が伸びたと思います。

私の卒論・修論研究では、一貫してアルミドロスに関する共同研究に携わらせて頂きました。関連学会の研究部会・学生会員メンバーとして、国内有数の関連企業および東北大学の方々と接する機会を与えて頂き、貴重な経験となりました。研究関連の専門的な知識を深く学ぶことができ、とても勉強になりました。

今年度は、新型コロナウイルスの影響を受けました。昨春の緊急事態宣言下は行動が制限され、研究が進まないジレンマを抱えました。同時に、今まで当たり前のように過ごしていた日常生活のありがたさを感じました。活動再開後は、やるべきことを整理しながら良いモチベーションで取り組めたと思います。学位記授与式では「奨励賞」を頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。

今年 4 月から社会人となります。様々な観点で今まで学んできたことを糧に、新たな環境で民間の技術系社員として頑張りたいと思います。いつか OB として関大に訪問できることを楽しみにしております。

最後に、ご指導頂きました先生方、研究室で共に活動した皆様、私の両親をはじめ、私を支えて頂いた全ての方々に心から感謝申し上げます。執筆の機会を与えていただいた同窓会関係者にお礼申し上げます。今後の皆様のご健勝と益々のご発展をお祈り申し上げます。



「学生時代を振り返って」

2021 年学士卒・山本研究室
堤 大輝

私は、2017 年 4 月に関西大学環境都市工学部エネルギー・環境工学科に入学しました。在学していた 4 年間だけでなく、これまでの人生を振り返る中で、大学 4 年次が最も濃密な時間だったように感じます。2020 年 4 月頃は、新型コロナウイルス感染症が蔓延し、自粛生活を強いられました。狭いアパートの一室に閉じ込められた退屈な日々は、時間の経過とともに現状や将来に対する不安へと変化していきました。そんな不安な毎日を耐えることができたのは、友人の存在が大きかったと思います。関西大学に入学し、他愛のないことでも笑いあえるような友人との出会いが私の学生生活をより豊かにしてくれました。

新型コロナウイルス感染症が一旦は落ち着いた 6 月頃から研究室での活動が始まりました。私が所属している山本研究室では、**Hansen 溶解度パラメータ(HSP)**という物質間の親和性評価の指標に関する研究をしています。研究室配属当初は、**HSP**に関する知識が全くなかったため、研究活動が続けられるのか非常に不安でした。しかし、先生方や先輩方のご指導のおかげで、一人の研究者として育てて頂きました。さらに、**HSP**の分野だけでなく、水酸化リチウムの製造プロセスの開発に携わらせて頂くなど多種多様な研究に取り組むことができました。また、本研究室では多くの企業と共同研究が盛んに行われています。企業の方々とコミュニケーションをとる中で、専門的な知識、技術、研究方法、問題解決方法など研究者として必要なことを学ばせて頂きました。

この春から私は、本学大学院に進学します。今後は個人研究だけでなく、後輩の指導や共同研究を中心となって取り組む必要があります。これから待ち受ける新たな課題に対して、楽しさを見つけながら、精進していきたいと思っています。

最後になりましたが、ご指導頂きました山本先生、荒木先生、研究室の仲間、学部時代の苦楽を共にした戸田氏(写真左)、土井氏(写真右)、そして両親に深く感謝申し上げます。

■ 山本 秀樹教授が副学長に就任

山本 秀樹教授が 2020 年 10 月より副学長に就任されました。

■ 福 康二郎助教, 松岡 光昭助教が准教授に昇任

2021 年 4 月より福先生と松岡先生が准教授に昇任されました。

■ 三宅 孝典教授, 村山 憲弘教授が受賞

三宅 孝典教授が石油学会 学会賞を, 村山 憲弘教授が田中貴金属記念財団 シルバー賞を受賞されました。

■ 橘 泰博 氏が退職

テクノサポートチームの橘 泰博さんが 2021 年 3 月末をもってご退職されました。42 年間に渡り、本学の教育を支えていただきました。

■ 応用化学科教室だより

2021 年度の応用化学コース長は工藤宏人教授、またバイオ分子コース長は大矢裕一教授です。キャリア担当は、西山豊教授と原田美由紀教授（応用化学コース担当）ならびに宮田隆志教授と古池哲也教授（バイオ分子コース担当）です。

学科のホームページ (<http://www2.chemmater.kansai-u.ac.jp/>) で、最新情報の詳細を確認することができます。

〇〇〇 編集後記 〇〇〇

第 26 回同窓会誌をお届け致します。「巻頭言」を学科教育主任の田中俊輔教授にお願い致しました。

「卒業生に聞く」では、福田氏、和田氏より原稿を頂戴しました。学生からは、和田氏と堤氏より原稿を頂きました。ご多忙の折、原稿の執筆にご協力頂いた皆様方に厚く御礼申し上げます。